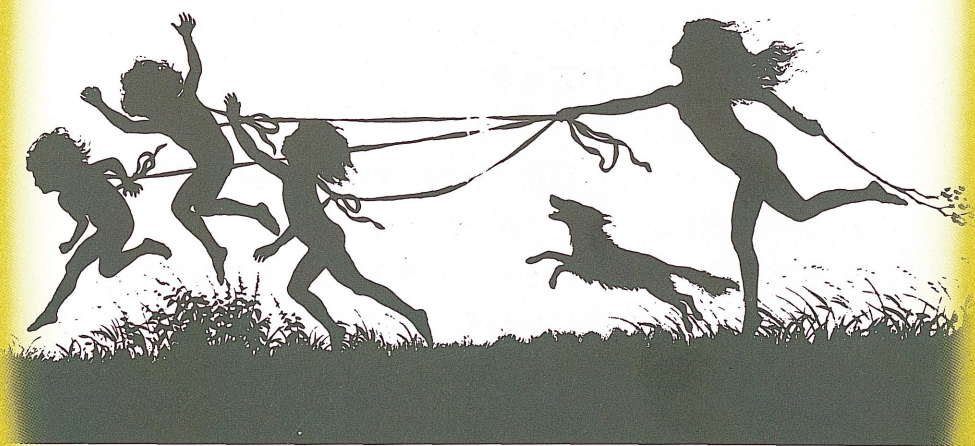


家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

16



第八十四卷 第六号 日本幼稚園協会

# 子どもの遊び

(全6巻)

●全国学校図書館協議会選定図書●

## 0歳から三歳

(3巻セット)土屋多喜栄 丸尾ひさ  
本吉圓子 田中文子 著

## 三歳から六歳

(3巻セット)本吉圓子 前典子  
笠間典美 田中文子 矢作邦子 著

0歳から6歳までの発達に応じた基本的な遊びをすてきなイラスト入りで紹介。



ワ、ワ、くん こんにちは

この本に収録した遊びは、0歳から6歳までの子どもの成長過程において、だれでもが大好きで、必ずといってよいほど通過する遊びです。

また、これだけはぜひ経験させたい遊びを現場の体験を生かした保育者の目でまとめたものです。

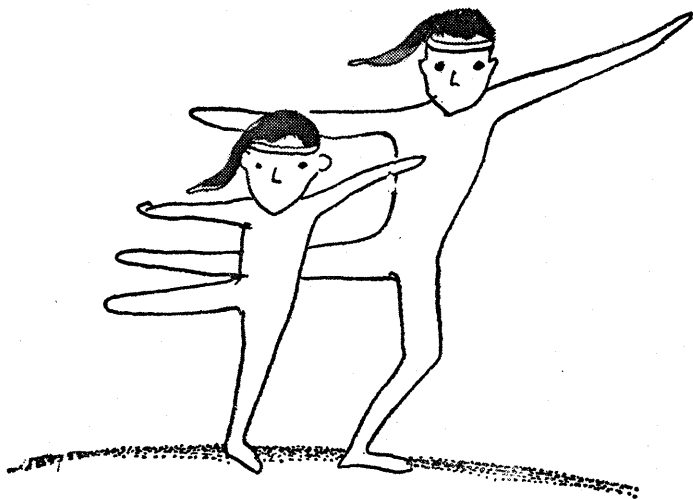
遊びの中で何が育っているか、保育者はどんなかかわり方をすればよいか、どうしたらその遊びがさらに楽しくなるかなどについて考え直すヒントがたくさんもり込まれています。

セットケース入り・セット定価 各3,300円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの  
フレーベル館

# 幼児の教育



第八十四卷 第六号

# 幼児の教育目次

——第八十四卷 六月号——

© 1985

日本幼稚園協会

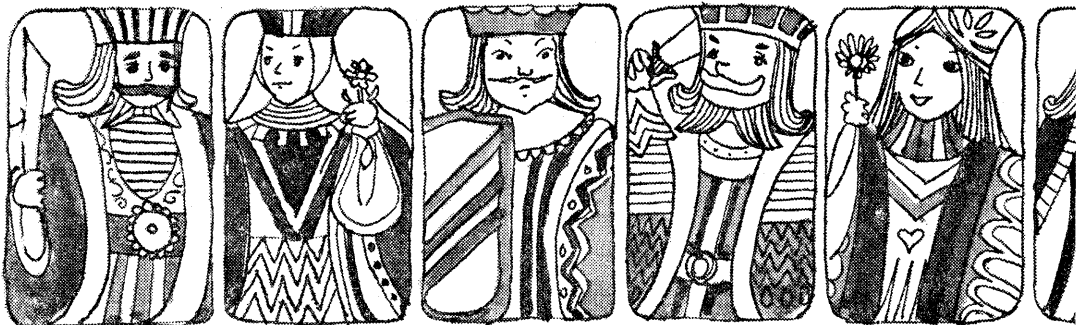
六月の花「あじさい」……………今井 百里江子…(4)

近代短歌に現われた子ども(最終回)……………大塚 雅彦…(8)

エッセイ 持ち味を食べましょう……………辻 嘉一…(18)

養護学校の日々 記憶された時間……………津守 真…(21)

幼児のこころ……………滝口 俊子…(26)





子どもたちのこと……………大橋 利恵子…(32)

若いおかあさんたちへ……………はるにれの会 向山 陽子…(35)

兎園隨筆⑩ 父と子……………蕪木 寿江…(43)

「いじめ」の心理について(前編)……………内田 安久…(46)

教育実習ノート……………(52)

ボク、サッカーの選手になるんだ!……………(57)

表紙絵・『ヨーロッパのきりがみと影絵』(岩崎美術社刊)より

カット・福田理恵



## 六月の花「あじさい」

今井 百里江子

梅雨前線の東上を思わせる空模様の頃になると、庭の「あじさい」の卵形の広葉の緑は滴るばかり色濃くなる。其の先に集まる小花は、まだ淡緑の塊まりに過ぎないが、やがて空がいよいよ低くなり、空気も淀み、鬱陶しい梅雨に入ると、飾り花と呼ばれる小花は四枚の花弁に紛う大形の萼片を挙げ、花の集まりは美しい手毬となる。一ヶ月余も続く長い梅雨の間を時に烈しく時に静かに降り注ぐ雨を存分に吸って、花は鮮やかな青色となり次第に美しい青紫色に変わってゆく。「あじさい」は神奈川・伊豆半島・伊豆七島の山地に自生する「がくあじさい」を母種として日本に生まれた園芸品種であり、学名 *Hydrangea macrophylla* Ser. var. *Otakasa Makino* と云う。学名中のオタクサは江戸時代の終りに日本へ来航し西洋文化の開花に貢献したかのシーボルト (Philipp Franz von Siebold

1796～1866) が、その日本人妻楠本お滝を記念して命名したものであるとされて居る。

\* \* \* \*

ドイツの医学・博物学者ジーボルトは一八二三年二十七才の時オランダ商館附医員として長崎に着任し、我国の動・植物・地理・歴史・言語等を研究した。また鳴滝塾を開いて高野長英等に医術を教え、或は実地に診療を行ったが、一八二八年帰国の際国禁の地図を所有する事が発覚し罪を問われ、日本御構(おがま)(入国禁止)を申渡され長崎を去った。後年許され一八五九年再び来航、幕府の外事顧問となった。一八六二年オランダに戻り翌年官職を退き故郷ヴェルツブルグに帰ったが、一八六六年病を得てミュンヘンで死去した。「日本」「日本植物誌」「日本動物誌」等を著わした。彼は始めて来日した折、長崎出島商館長の江戸参勤に従って江戸に赴いたが(一八二六年二月十五日―七月七日)、その折の見聞を「江戸参府紀行」として著わして居る。時しも梅雨の頃伊豆付近で「あじさい」を採集した事が記されてある。

来日間もない頃(一八二三)、長崎丸山の引田屋の遊女其扇(そのあき)と相知り、落籍し鳴滝塾に移した。其扇(一八〇七―一八六九)は楠本お滝と云い、十五・六才の頃引田屋鉄之助の抱遊女として売られ丸山の「山の花」と謳われた。その瞳が魅力に輝やく美貌の持主であったという。彼が三十才、彼女が十九才の年であった。彼は年齢・人種・国境を越えた誠実な愛を美しい遊女に傾け、日常「おたくさ」と呼んだという。文政十年其扇二十一才の

年一女をあげ阿伊禰と名付け幸せな日々が続いたが、滞日六年後、思わぬ罪を得て日本を立去る事となった。彼を乗せた蘭船ホウトマン号が長崎の港口小瀬戸を將に過ぎようとした時、一隻の小舟がこれに近づいた。この中には漁夫に身をやつした門人、高良齋と二宮敬作がその身に降りかかる危険を顧みず、お伊禰を抱いたお滝を守って乗って居た。蘭船からボートが降され小舟に漕ぎ寄せられた。中にはジーボルトが最後の別れを惜しんで乗って居た。彼は良齋・敬作にお滝・お伊禰の将来をくれぐれも托し、別れの悲しみに耐えつつ去って行つた。お伊禰は二才八ヶ月であつた。帰国に際して彼は一つの香盒を造らせ、その中に二人の毛髪を納めて持帰つた。黒漆塗の盒子の蓋の表にはお滝の姿が、裏にはお伊禰の可憐な稚兒姿が優美な青貝象眼により描かれてあつた。帰国後の彼は日本研究家として学界に名を馳せたが、常に日本を恋い、残し置いた妻子の上を片時も忘れる事が無かつた。かの香盒は常に彼の座右に置かれて在つたという。

一八五八年オランダと通商条約が結ばれ日本に於ける国禁を解かれた彼は翌年再び懐しい日本を訪れる事となった。彼は六十三才であつたが、五十三才の折ベルリンで結婚した妻との間に得た長子アレキサンドル（十三才）唯一人を伴つての来日であつた。彼が後事を托した良齋は既に亡かつたが、敬作は病の身をおして、お滝・お伊禰・お伊禰の娘たかと共にこれを迎え再会の喜びを分ち合つた。ジーボルトは良齋・敬作の兩人が、依托した愛児を良く守り養育し立派に世に立たせた事を深く感謝した。お伊禰は其の時三十二才、既に産科医として自立して居た。お滝は彼の帰国後他家に嫁したが、其後夫を亡くし



て独り銅座町に在って油屋を営んでいたが、再び彼にまみえて、万感の思いにくれたという。一八六二年帰国に当りお伊禰の成人を眼のあたりにした彼は、持ち来っていた香盒を、今は用無しとして楠本家に贈った。

故国ドイツに戻った彼はミュンヘンで病にたおれ「美しい平和の国へゆく」と云う最後の言葉を遺して生涯の幕を閉じた。慶応二年・七十才であった。お滝は三年の後明治二年没した。六十二才であった。

\* \* \* \*

牧野新日本植物図鑑 牧野富太郎著 前川文夫・原寛・津山尚 改訂編集

一九七七 北隆館

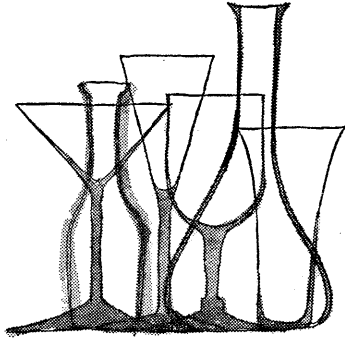
原色図譜園芸植物 浅山英・太田洋愛・二口善雄・一九七一 平凡社

江戸参府紀行 シーボルト著 斎藤信訳(東洋文庫87)一九六七 平凡社

シーボルト先生その生涯及び功業 吳秀三著 岩生成一解説

- 1 東洋文庫103 一九六七 平凡社
- 2 東洋文庫115 一九六八 平凡社
- 3 東洋文庫117 一九六八 平凡社

# 近代短歌に現われた子ども（最終回）



大塚 雅彦

## （47） 服役囚の歌

死刑囚のようにいつ執行の呼び出しがあるかわからぬ恐怖に脅えつつ、「壁厚き部屋」に日を送る者でなくても、刑務所の中にいわゆる圜圀の身を閉じこめられて、贖罪しどくと更生の日々をすごしている人々が、この世には大勢いる。こんにち刑事政策の面で、施設内処遇よりも施設外処遇、社会内処遇の方を高く評価し、その方に矯正効果を期待する趨勢が強くなっているけれども、刑事施設に犯罪をおかした者を収容して、さまざまな矯正方法を用いて、彼等のいわゆる改過遷善を図るのは、人類が長い間かかって獲得した知恵であり、歴史の積み重ねであるだろう。ただ、刑事施設に關しても、従来のように隠蔽主義的、閉鎖主義的に社

会から囚人を隔離して、特殊なテリトリーの中で彼等を教育しようという方法よりも、出来るだけ社会との連関の中で、許容し得る限り開放施設的な面を採り入れて、服役者を出来るだけ早く社会に再適応させようとする近代的な考え方もまた強くなっている。

このような傾向を反映してか、従来はいずれかといえればあまり世に知られなかった刑務所の実態や、所内の服役者の生活状況などを紹介する書物なども、最近はかなり増えつつある。例えば佐藤晴夫・小沢禧一『刑務所——その知られざる世界』昭58・1)は、全国に七十六施設もある刑務所について、その組織、運営等を、法務省勤務の長い著者たちが総合的に概述したものである。また、網走刑務所<sup>せいの</sup>といえれば重罪をおかした者を収容する施設として「網走番外地」などのやや興味本位的な呼称で、マスコミ等で暗いイメージをもって扱われがちであるが、明治中葉に網走という嘗ての北辺の小漁村に「網走集治監」が創設され、それが「網走監獄」から「網走刑務所」と名称が変わり、九十余年の年月を経て今日に

至る長い歴史をもっているのである。そして年間六十万人もの刑務所を訪れる観光客が今日では居るとのことであり、今昔の感に堪えない。山谷一郎『網走刑務所』

(昭58・2)は、この刑務所内の文芸誌「樹水林」の俳句と随筆の講師として所内に出入するようになった著者が、網走刑務所が「誤りを伝えられている部分も多い」ので「そうした誤りを正す意味も含めて、網走刑務所のあるままの姿を伝えたい」(あとがき)と書き綴った、すこぶる面白い著作である。ところで、不幸にしつ女子で犯罪をおかす者も少なくないが、それらの中、全国の女子刑務所五ヶ所に服役中の受刑者は現在、千数百人居るものと思われる。早瀬圭一『長い午後——女子刑務所の日々』(昭58・2)はジャーナリストの著者が女子刑務所を訪い、その実態や女囚のライフ・ヒストリーや所内の生活状況を紹介したもので、その叙述は三つの物語が中核になっている。すなわち、①夫に裏切られて離婚し職を転々とする中に、未熟児で知恵遅れのが子と無理心中を計り、子どもだけを死なせたT子、②酒びたりの

上にギャンブルと女遊びをやめない夫を殺したE子、①同居の夫と義父母に八年間も虐待され、自殺未遂二回の末、遂に姑を殺したK子——である。いずれもこれ以上の不幸はないと思われる程、悪条件が集中的に一人の女性に襲いかかったケースであるだけに、読者に重い衝撃を与える。

これらはいずれも刑務所について書かれた読みごたえある著作であるが、多くの刑務所内で生活指導の一環として行われている文芸活動（短歌、俳句その他）による情操面の指導については、あまり語られていない。多くの刑務所内では短歌や俳句の会があり、篤志面接委員を依頼している専門歌人や専門俳人を外部から招いて、囚人の創作活動を指導してもらって居り、機関紙のような歌誌、俳誌を発行しているところも少なくないのである。いま、その一、二を紹介しよう。

#### ①歌集『壁を叩く者』

この歌集は熊本刑務所文化教育後援会から発行されて

おり、私の持っているのはその『第三集』（昭39・11）と『第五集』（昭47・11）とであり、いずれも編者の故内田守人氏から直接私がいただいたものである。内田博士はライ園歌人島田尺草や明石海人らを世に出した人としてその項でも触れたが、歌誌「水甕」の同人であり、また自ら歌誌「人間的」を主宰する歌人であった。熊本刑務所で短歌の文芸活動を始めたのが早く昭和二十三年であるが、昭和二十七年から当時熊本短大教授をしていた内田氏に指導を依頼したのである。爾来、博士は所内の機関誌「とろく」（刑務所の所在地渡鹿とろくによる命名らしい）歌壇の選者や月例歌会の指導を熱心につとめた。そして服役者たちの作品を合同歌集として第一集、第二集……と、次々に刊行して来たのである。

この『第五集』には西本願寺門主大谷光照、歌誌「水甕」主幹加藤将之（哲学者）、歌誌「群山」主宰扇畑忠雄（国文学者）、九州地方更生保護委員会委員長長藤井恵、熊本刑務所長阿部房雄等の序文があり、編集者内田の「巻末の記」がある。そして、出詠者三十八名、歌数一

○七一首が収められ、併せて二十年間の優秀作三十名の四二〇首も収録されている。作品は编者によりわざわざ種類別に分類されている懇切さであるが、そのうち、主として「人の子としての哀歎」という項目等の中の、子どもを対象にした作品を抄出してみよう。

① 椅子引きて母坐らす仕種しぐまなす

吾子をし見れば大人さびたり

(彦山太郎)

② いつの間にか生えし乳歯に乳房をば

噛まれ痛しと妻よりの文

(大浜住人)

③ 面会を終えし吾が耳にコッコツと

去り行く吾子の靴音小さき

(全)

④ 末の娘はまだみぬ父の写真をば

妻に持ちより問ひ責めららし

(浜 たかし)

⑤ 含はこ差みの吾娘あなは妻の背にかくれつつ

時たま顔出し小声にささやく

(全)

⑥ 吾娘の見るひとみはわれに向けられず

あやしく見つむ立会看守を

(全)

⑦ 娘に渡る母子年金の手続に

在監証明送りてかなし

(成田森美)

⑧ 大いなる眸めは聡明の相なると

思ひつつ吾娘と対話しており

(甲山五郎)

⑨ チューインガムパパも食はめよと差し出しぬ

いとしき吾子よ抱きてやりたし

(松島景一)

①③⑤⑥⑧⑨等は、妻子が面会に来た折の作である。服役者が子と接触できるのは、妻が子と共に来る面

会の折と、妻のたよりによる情報や、同封されてくる写真等による場合以外はあり得ないから、子をうたう作品がこれらの場合に集中するのはやむをえない。②と③は同じ作者だが、二つの歌の子どもは違うようで、③の子の方が②の乳児の兄か姉かもしれない。④から⑥までも同一人の作だが、④の末娘と、⑤⑥の娘とは別の子で、後者の方が姉娘かもしれない。末娘は作者が入獄後に生まれたらしいのであり、それだけに未だ見ぬこの娘に寄せる作者の思いが、痛いほどよくわかる。⑥の歌や⑨の歌の下旬は面会室のきびしい雰囲気や鋭く描き出している。⑦もまた、こういうことをせざるを得ない在監者の特殊な立場を、具体的に詠出している。⑧はここに金網を隔てて対面している父娘の状況が、眼に見えるようである。

㊤歌集『ともしび』

これは数少ない女子刑務所の服役者の合同歌集（女囚作品集）である。昭和四十五年二月、栃木刑務所刊で、

編集者は安藤佐貴子・森口鶴子両歌人であり、この歌集も私は安藤女史（当時、歌誌「地表」編集代表者）からいただいたものである。矢島栃木刑務所長の序文と、<sup>和</sup>久同所教育課長及び両編集者の「あとがき」があり、八十七名の女囚の作品を収めている。この女子刑務所が、篤志面接委員を兼ねる両歌人（桐生市在住）に服役者の短歌指導を委嘱したのは昭和三十九年であるが、以後五年間の彼女等の作品を集めたものである。作者名はむろんペンネームで、本名ではない。「<sup>ハ</sup>犯罪の蔭に女あり」という言葉は常識のように言われるが、ここばかりは「<sup>ハ</sup>犯罪の蔭に男あり」と言う言葉があてはまる程、男で苦勞しているひとが多い」という安藤女史の言が、この刑務所の囚人たちの特色を一言にしてよく語っているが、「本集の作者はその殆んどが、ここへ来てから作歌をはじめた人たち」（安藤）ということも心に置いて、読者は読むべきであろう。

① 母吾のつとめ済むまで学びやめ



山に働くと子の便り来ぬ

(伊井かづ子)

常の如くに子は登校す

(杉浦文子)

② この中のどれかを吾子が選ぶやも

ズック縫製なしつつ思ふ

(石坂伸子)

⑧ 作業終へ今宵たのしむ盆踊り

遠く故郷の子を思ひをり

(武井久子)

③ 寄り添ひて来し子の髪に陽の匂ひ

溜りて快かりしを思ふ

(牛島よし子)

⑨ 獄にゐる母とは知らず子の便り

「みやげ頼む」を繰返し読む

(竹山たか子)

④ 久々に出でし獄庭に「子とろ」して

転べば春の土の香のして

(小田加代子)

⑩ 芹摘みし戸田の川面の競艇に

拍手せし子の一周忌過ぐ

(寺山京子)

⑤ 獄に馴れ記すことなき今日の日記

吾子の名のみを書きてペン置く

(木本けい子)

⑪ 子を托し来し囚友は張る乳を

双手に押へ作業場にゆく

(中山みさ子)

⑥ 免業の日を降りやまぬ五月雨に

なすこともなく吾子想ひをり

(佐藤久江)

⑫ 移監さるる車窓に顔を寄せしのみ

夫<sup>つま</sup>子の住める小田原を過ぐ

(平田かづ江)

⑦ 売られゆく山羊の最後の乳のみて

⑬ 面会の短き時を惜しみつつ

初孫抱けば乳の匂ひす

豆食む獄の節分の夜を

(福島みさ子)

(八藤恭子)

⑭ 憤ひの心を込めてわが張りし

⑳ 吾が腕にかけられし手錠を幼児は

この反物を吾子に着せし

無心に鳴らし戯れてをり

(古橋よし江)

(山上敏子)

⑮ 夫子恋ふるを生きゆく張りどけふの日も

㉑ 久々に面会の子は金網の

心急ぎつつ風船を貼る

外より我を「オバタン」と呼ぶ

(星田とみ)

(全)

⑯ 禁酒すと誓ひし夫がひそかにも

㉒ おのが手に命奪ひし幼子の

子に酒買ふを頼みゐるらし

菩提祈りて短冊に記す

(全)

(全)

⑰ 来賓の幼子走りて誰彼の

瞳を濡らす獄の運動会

(三田貞子)

⑱ 末の子の根雪の便り獄に来て

共にスキーに行かむと記す

(三田百合子)

⑲ 幸を希ひて吾子の年の数の

いずれも一読歌意明瞭な作品ばかりなので、多く註釈の必要はあるまい。女囚の歌は男囚のそれに較べて、女性特有の問題(例えば⑩等)をせつなくうたう点や、いかにも女性らしいやさしい心づかいが出ている(例えば②③④⑤⑥等)のが特色である。所内のきびしい規則、作業内容、リクリエーションをおのずから示す歌もある

(例えば②⑥⑧⑫⑭⑮⑰等)。⑬のように孫を持つような老囚(？)も居るのだ。⑯のように、やくざな夫を持つ女性も居る。だからこそ彼女の不幸も生じたのだろう。⑳㉑㉒は、思わずドキンとさせられる内容である。母である自分を子に忘れられている㉓ほど深刻な悲哀があるうか。㉔の作者が殺した幼子は自分の子か？ 他人の子か？ 「子殺し」事件の少なくない今日、色々と考えさせられる歌だ。ともあれ、囚人たちは出獄すれば作歌などやめてしまったり、忘れたりする者が多いだろうが、それでも少なくとも所内でまじめに作歌をすることに、内田博士の言う「短歌カウンセリング」的効果を認めることが出来るであろうことを、私は疑わないのである。

#### (48) 非行少年の親の歌

非行少年自身の短歌作品を見ることはそう困難ではないし、私自身も家裁に長く奉職していた間に、何年も彼等の作歌を指導したことがあり、また、その作品を世に紹介したこともある(例えば拙著『非行少年』(昭38・

6)所収「非行少年の歌」、拙著『非行を見る』(昭43・5)所収「非行と文学」等)。しかし、非行少年の親の短歌作品はなかなか見られない。非行少年の親で短歌を作る人はそう多くないかもしれないし、たとい作っても、自分の子の非行を恥じているから、あまり公表しないだろうからである。そこで本稿の最後に、その種の作品を、すこし紹介しよう。新仮名づかいの作品である。

① 虞犯少年という語も知りぬわが直子

金なくなれば帰りてくれよ

② 子の行方夜なか報らせに来てくれし

潤ちゃんは今鑑別所に住む

③ 堪えがたき言葉あびせられたる子が

帰りつつ警官を憎みののしる

④ 思うさまスクーター飛ばす爽快を

脚に怪我してなお子は言えり

道筋たどり子の嘘を知る

⑤ 歳出の帳簿整えているときに

⑪ 子の性質幼時に決まると學者いう

補導センターより呼出し受くる

戦争あり戦後あり夫の酒賭博ありき

⑥ 子のコート質受けするとのれん押せば

⑫ 春來<sup>きた</sup>たり十八才に子がなれば

金借りに来ていたる少年

わが籍抜けて人妻となる

⑦ 愛情過多又冷たし又自信なし

すさまじい作品群であり、圧倒的な迫力をもつリアル

子がぐれてより我へのごとは

な歌ばかりだ。なまじの少年非行に関する論文などを読

⑧ 鋭き刃当てられて血を吹くごとし

むよりも、少年非行の様相や非行少年の親の心理を、は

隣りに入りて子が盗みせり

るかに味わい深く示してくれる。作者は関西に住む主婦

⑨ 何かわけの判らぬものに憑<sup>よ</sup>かれたる

で、姓名はあげないでおくが或る歌誌の会員である。この娘さんも既に立直って、今頃は良き主婦になっている

如きわが子のぐれてゆくさま

●おわりに

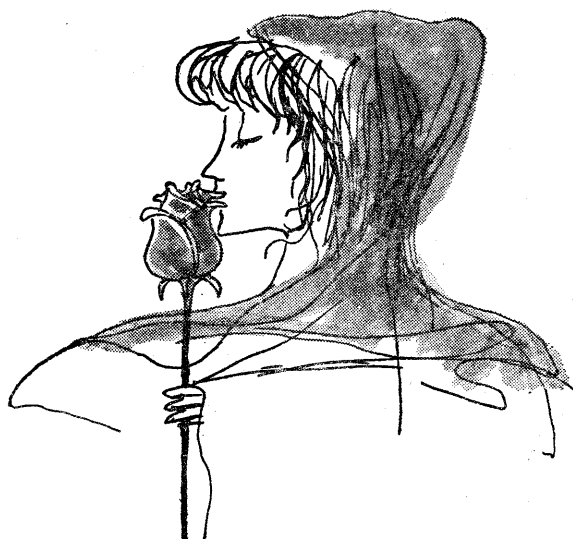
⑩ 働くという店書きし紙持ちちて

長い間、この連載を続けて来たが、今回をもって一応

完結に致したい。私は短歌に関する文章を今迄随分多く書いて来たが、今回のようなテーマで、こんなに長く書き続けたのは始めてである。自由に書かせて下さった編集部 の寛大さに感謝申し上げたい。始めは短歌作品だけを簡単に紹介するつもりだったが、切角なら作者である近代歌人たちの経歴やアウトラインをも知ってもらおうと遠大な(?)志をたてたため、頭でっかちの説明が多くなり、思わず長い連載になってしまった。しかし、近・現代短歌史の中で、子どもをうたった短歌がこんなに多いとは、私も実は気付かなかった。その意味で私自身のためにも、よい勉強になった。また、終りの方の三分の一くらいは、今のわが国で大きな社会問題を提示する歌集などから作品を抄出紹介したため、すこしトーンが違ってしまった。私は執筆しながら、読者が、このように特殊な内容のものの連載を果して喜んで読んで下さるかを絶えず気にしながら、しかし同時にまた、子どもを愛し子どもに強い関心を持つ読者諸氏にこそむしろ読んでいただきたいと思いつつ書き続けた。読者諸氏にも感

謝申し上げたい。(了)

(お茶の水女子大学)



エッセイ

## 持ち味を食べましよう

辻留 辻 嘉一

雪間より薄紫の芽うど哉 芭蕉

真白な雪の間から、薄紫のウドの芽が出ているという美しい情景を詠んでおられる句を雪の日に、よく思いだします。

日本の北の地方は雪が多くて申訳けないことと思いますが、もう、そうこうしているうちに「下萌ゆ」という言葉に気づくことになりませんが、地上に出たいと思っている無数のものの芽に思いあたります。

とくに、ぜんまい、わらびなどは、雪に押さえられて、上に伸びる力が軸を太くして、おいしい味をつくっ

てくれます。

天候に恵まれている地方のわらびやぜんまいは細くてひよろひよろしており、どうしてこんなに味が違うのかと、味の不足に不思議を感じます。

ふきのとうも雪どけとともに芽を出し、芹、土筆、うど、よもぎ、たけのこに至るまで、五月までの野草、野菜はいずれもほろ苦さをもっており、繊維質のものばかりであります。ほろ苦さとは、噛んで味わっていると、味の奥から苦味が出てまいり、その苦みというものが案外、おいしいなと思えてきます。

二十歳まではフキのどこがおいしいのかとフキの好き



な人の味覚をうたがったほどでした。ところが、今日になりますと、フキの出でくるのか待ち遠しくて、フキのほろ苦さを楽しんで味わいます。

そして、繊維の多いということは、冬の間の運動不足による胃腸障害を治してやろうとする、天意からの繊維であろうと考えます。ご承知のように繊維の多い食べ物、便通をよくし苦味は胃腸を正常にしてくれます。なんと有難いことはありませんか。

しかしながら、五月になりますと、冬から続いてきたものは全然なくなり、夏へ向かうものと交替いたします。

豆るいに瓜るい、茄子の三つが夏の間の副食の服役として楽しませてくれます。

しかしながら味つけが優先して、物の味を味わうことを忘れたように思われます。それは、戦後の食べものが昔とはことなり、欧風化したり、また中国化したお惣菜で育てられたので、日本の食べものの良さがわからなくなったからでもあります。

その原因の最も重要なことは、日本の料理は、食べものの素材の滋味を大切に考え、その滋味をよりおいしくと考えて料理するからでありまして、滋味を濃厚調味で覆いかくしたり、濃厚なものと一緒に調味しないように考えてきたからであります。

欧風調味や中国料理は、大昔からの習慣によって調味の甲乙が全体の味わいを左右するからであります。それは獣肉一辺倒では楽しめないもので、調味に苦勞をしてスパイスを用いたり、いろいろと苦勞を重ねて今日に至ったからであろうと思います。

中国料理は、乾燥した素材を巧みに使い、それを何種も混ぜ合わせて作られる料理が多く総合された旨さを理想として、長年研究されてまいったからであり、いずれもが調味本位によって完成した料理のように思われるからであります。

その二つの料理が、戦後の味覚空白の日本に入ってきたまして、濃厚調味の旨さを唯一の美味と感じた人達が、今もって、そのことを信じているように思われるのであ

ります。

よく見ればなずな花咲く垣根哉 芭蕉

この句を繰返して愛唱しておりますが、何気ないようなことに目を向けないと、大切なことを見のがすのではないかと考えます。

味わりという大切なことも、気をつけて味わっていないと、ただ漠然とノドを通すだけでは、ものの喜びも味わいにも気がつかず、素材の個々の真味もつかめないのではないでしようか。

その例として、茄子の丸炊きという昔からのおかずのつくり方をのべてみます。

まず、茄子の皮肌にタテに包丁目を細かく入れ、鍋に並べ入れ、水をひたひたに注<sup>ま</sup>して煮立てます。その時、濃厚な味をもった、牛肉や獣肉を一緒に入れて煮ますと、その味が茄子のもっている滋味を消してしまい、茄子の持ち味はどこかに行ってしまう、濃厚な味で押さえ

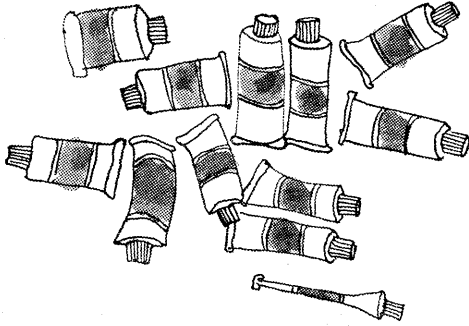
つけられたような味となります。

茄子の丸炊きには、茄子の持ち味を引きたててくれる干海老を少量一緒にに入れて炊くにかぎります。茄子を並べた上にバラバラとふり入れ、落し蓋をして中火で煮ます。

調味の砂糖や味噌は入れないで。薄口醬油だけで、やや弱い目の味つけにして、煮すぎたかと思うくらいに煮て、鍋を火から降し、その鍋のまま一夜を越させます。

あくる日、そのままにおろし生姜を添えて味わりか、二度煮立てて生姜をのせて味わいますと、茄子の持ち味を味わうことができます。干海老を沢山入れると、干海老の味が茄子にうつりますので、引きたてる——といった意味で少量に止めておくことが大切です。

調味の濃淡はご自由になさって、とにかく茄子の持ち味をたしかに賞味してください。煮る加減はやや煮すぎたかな——といったぐらいが上乘であります。



## 養護学校の日々 記憶された時間

津守 真

一月中旬のある日、子どもたちが帰るころの時間に、昨年幼稚部を卒業して特殊学級にいったM子が、母親と父親と妹と一緒に訪ねてきた。室内で他の子と遊んでいた私の前に突然あらわれたM子が、以前よりも背丈が伸びたように思えて、一瞬、私は戸迷った。M子も私を見て、すぐには親しさを示さなかった。じきに母親が、「つもりせんせい。おぼえているでしょう」とM子に声をかけたが、M子は私を覚えているかどうか分らないほど、

何の反応も示さなかった。父親が私に笑いかけて挨拶した。

M子は、最初は立ち止ったまま、しばらく動かなかつたが、やがて足もとにあった毛糸の紐のついた汽車を引張った。それが障害物につかえたとき、私は手を貸して動くようにした。こんなことからはいじまって、M子の中に動き出した能動性を助けるように、私もM子と一緒に動き、滑り台と一緒にすべると、笑顔を見せた。M子にとって、この場所と人が、現在、意味をもちはじめたように見えた。

M子は箱車を見て、「赤ちゃんがこれにのるの」と云う。私は、M子が幼稚園のころ、妹はまだ赤ちゃんの時期を脱げ出たばかりだったことを思い出した。母親は、写真をもつてきて、M子の学校での様子などを話してくれた。M子だけが体育服を着かえなかったり、入学当初は本人も気を使うのか疲れた様子があったが、このごろは無事に過していると話してくれた。

庭の片隅に、最近設置した赤い色のシーソーがあり、

M子はそのシーソーに乗って遊びはじめたので、私は他の端に坐って、二人で何度も上ったり下ったりした。日がかげって寒くなってきたが、M子は私と一緒にいることを楽しんでる様子なので、私も頑張ってシーソーをつづけた。

そのとき、突然、工事場で、ブ——ンという金属音がした。M子はケラケラ笑う。私も、何だかM子と笑うのがうれしくて、心から笑った。何度も何度も一緒に笑った。また、ブ——ンと音がしたとき、M子は、「ブ——ンだって、おなら」と云ってまた笑う。もう笑うことしかない世界みたいだった。寒さも、シーソーに乗っている現実の感覚もこえて、ただこの子と笑いあう世界だけがあった。

底が抜けた笑いの世界には、未来の心配もなく、過去の痛みもない。現実のあらゆる枠がとり払われたところに、もうひとつの別の世界がある。広く深い世界が一面にひろがったような感覚に浸って、その時が過ぎ去るのが残念に思えてくる。現在に存在すること自体に価値の

ある、共有された子どもの世界である。こうして笑っている最中に、M子は突然「ここきたことある」と云う。私と一緒に、ただひたすらに笑い合ったとき、これは以前に体験したのと同じ世界だと再認した。

二年半前に、私はM子と一緒に、周囲を忘れてひたすらに遊んだ類似の体験が何度もあった。その最初は夏のことだったが、砂場で他の子どもに砂をかけられ、M子は私の後にかくれてキャーキャー声を立てて逃げまわりながら、一緒に面白く三十分くらいを共に過ごした。一週間後にまた砂場でM子に出会ったとき、私はおだんごですと云って砂を差し出した。M子は「うんこのおだんごです。おしっこです」と云う。M子は家を引越してから、便所がこわくなり、排泄のことで親子ともに悩んでいた。そのうちにM子は皿に砂を盛って私に差し出した。私が受けとろうとすると、その砂を私にかけて笑った。私が皿を差し出すと、すぐにその皿の砂を私にかけてケラケラ笑う。私もやり返したりやられたり、それをくり

返して一緒に笑い合った。それから追いかけっこをして、いるうちに昼食になった。

更に一週間の後、庭に出るとM子が私を見て笑う。庭に出した机の上に、筆と絵の具が置いてあった。M子は筆をとって、私の腕に絵の具を塗った。それから手で絵の具を腕一面に塗った。私は紙にえのぐでかきはじめたが、M子はそれには見向きもしない。私の顔にもえのぐを塗ろうとしたが、私は立っていたのでとどかず、シャツに赤や白や青で色をつけた。いい加減のところでは手を洗いにさそった。M子は自分で限度を保ってやってしたが、非常にたのしいという様子ではなかった。帰りにかけに母親が云うのには、きょうはつもりせんと遊ぶといつて家を出てきたとのことであった。私は、もっと思い切つて遊ばなかったことを後悔した。いまの私だつたならば、こんな中途半端なつき合い方をしなかっただろう。また、信頼関係ができたときに、その人がこれであるとたしかめるのにその顔に絵の具を塗る、ということを、もっと早くに察知しただろう。何よりも、

その場を十分にたのしむるように、もっと力をかしただらう。こんな不満足感を私自身に残したまま夏休みにはいり、その後しばらくの間、M子と接する機会がなかった。

十一月になって、ある日、M子は私の手をひいて、裏庭の砂場にいった。容器にぬれた砂がついているのを見て、「きたない」と云う。私は「白砂で洗うときれいになるよ」というと、M子は容器にかわいた砂をいれて、私の頭の上から砂をざあざあとかけた。「からだも、目も洗いましょう。口を洗いましょう」と云って、M子は私からだ中に砂をかけた。丁度このころ、私は障害児の保育の場と、普通の子どもの保育の場と、いずれかを選択すべく決断をせまられていたが、まだ決しかねて、心が揺れ動いていた。私は何かこの子どもたちに対して犯罪めいた思いがあり、M子が私の頭から砂をかけてとき、されるに任せてそれを受けようと思った。これはきわめて特殊な条件における私の側の心理作用であるが、そのことがM子の活動に私が全面的に協力すること

を可能にしたのだと思う。砂をかけたりにかけられたりしながら、M子と一緒に心から笑い合った。

その後、M子と私は、いろいろな場面で遊ぶことになった。人形をおしっこにつれてゆく遊び。お化けごっこなど、排泄の問題や、恐怖の問題をかかえていたこの子どもとの間で、私も考えさせられることが多くあった。そしてこのような遊びと共に、一緒に笑い合うことによって遊びが終結することがしばしばあった。そして、丁度二年前の一月には、いつものように人形をおしっこにつれてゆく遊びをして後、戸外の滑り台の上のべランダで、M子と私は横になって、青空をながめながら、注射ごっこをして一緒に笑いあい、前後を忘れて、その時間をたのしんだ。実際には短時間であるが、それは深く存在の根底に達するような、二人に共有され、他のすべてを忘れさせる時間であった。その時は、次の現実に移りゆき、過ぎ去っても、私はその体験を忘れることができないでいた。

それが私だけの体験ではなく、M子にも共通に体験さ



れていたことが、二年後に再会したこのときに確認された。M子が「ここきたことある」と云ったとき、このシーソーは二年前にはなかった新しい道具だから、知覚された物が記憶の媒介となっているのではなく、同種の体験が記憶となって甦ったのであることは明かである。このことは、大人の時間とは異質な子どもの時間があることを考えさせてくれる。

子どもの生きる時間は、大人が予定に従って活動を進めてゆくときの、順序を追って一様に流れる直線の時間とは別の次元にある。それは過去や未来の束縛から解放たれて、人が自分らしく生きることのできる根源的時間である。直線の時間と対比するならば、瞬間の一点を深く掘り下げたところにあらわれる、無時間的時間ともいえる。その中で人は真に能動的になり創造的になる。

普段、直線の時間の枠に縛られて生活している大人は、子どもをもその中にはめこもうとする。子どもはそれにある程度従うのだが、子どもの生活の本領は、直線的时间ではなく、根源的時間の中にある。大人は、最初

は努力を要するのだが、子どもの生活に参与することによって、子どもの時間を共有して体験することができ。ここに記したように、この過程は徐々に進行し、突然、双方が互いに相手に対して開かれる。そのとき、子どもは自分の世界を生きはじめ、大人も、自分自身の底に、子どもの世界があったことに気付く。

子どもの生きる根源的時間は、子どものいるところ、どこにもある。私共が心を開いて子どもの時間にふれて生きはじめるとき、保育者と云いうるのではないかと思う。

(愛育養護学校)

# 幼児のころ

滝口俊子

家族で紅白歌合戦を見ていた、昨年の大晦日の夜のこと、中学三年生の次女が突然、

「恵美ね、新沼謙治のお嫁さんになろうって、幼稚園の頃、決めていたの」と言いました。

「どうして？」と、びっくりして私。

「あの頃、新沼謙治が『お嫁においで』ってテレビで歌っていたでしょ。だからお嫁にいつてあげようって思っていたの。」

何とも愛らしい発想に、私の心は和みました。

そしてこの事をきっかけに、慌ただしい日ごろの生活では思い出すことの殆どなかった、三人の子供達の幼かった日々のが、あれこれ思い浮かんで参りました。

もっとももっと大切に、子供とのあの頃を過ごしておくのだったと、懐かしさと、ちょっぴり後悔を感じます。

そして、幼児の親をもう一度やり直したい思いになりますが、叶わない夢でありましょうから、その分も心理臨床の場であ会うお子さんたちや、附属幼稚園の園児たち

の、良き発達促進的な環境になれるよう努めたいと思います。

永年ひそかに憧れていました『幼児の教育』に執筆させていただくこのチャンスに、三人の我が子の幼い頃の事を記すことをお許しいただき、未熟親のせめての償いと思いたいと思います。

### ママの洋服

長女は、私が大学院を修了した年の秋、生まれました。いくらか分かりかけてきた心理臨床の仕事は捨て難く、と言って、「普通のお母さん」になることを当然と期待している夫を始め周囲の人々の思いに逆らうことにも抵抗があり、数ヶ月間、悶々と過ごしておりました。

こんな母親の不安定な気持ちを感じとってか、よく泣く赤ちゃんで、当時の育児書の「抱きぐせをつけないように」という言葉を気にしいしい、日中は始終だっこをしておりました。右手で抱いて、左手で本を支えて読ん

でいましたので、抱かれた子の心も満たされてはいなかったのでしょうか。間もなく、立って抱かないと泣き続けるようになり、本を立てるために指揮者の使うような譜面台が欲しいと、まじめに考えたりもしました。

やがて、「いいお母さん」という周囲の目にとられるより、自分自身としての連続性を取り戻すことを決断しました。しかし、葛藤はすぐに解決出来るものではなく、時には「早すぎた子」という思いを抱き、罪悪感に苦しんだりもしました。

あちこち保育所を探した後、当時はまだ開けていなかった埼玉県の志木の家から、東京の杉並の実家まで、早朝に長女を運び、夜連れて帰るといふ生活を始めました。

ひとつ年上のいとこや、子供の扱いの上手なお手伝いのいる実家での生活に、娘はすぐに馴染んだように見えましたし、次第に私も気持ちに落ち着きを取り戻す事が出来ました。我が子を、心から「かわいい」と感じられるゆとりを持ったのも、この頃からのことです。

ヨチヨチ歩きが出来るようになり、片言を話すようになった娘にとって、いとこと遊べる杉並の生活が何にもまして楽しいものと信じこんで、もっと研究に身を入れたいと考え始めていた私にとって、思ってもいなかった事を聞きました。

昼間は元気に遊んでいる娘が、夕方になると、たんすの上に私が脱ぎ捨てた普段着を、背のびして引っぱりおろし、大事そうに抱きかかえているというのです。

「俊子のような親でも、やっぱり母親がいいのねえ」とへんな感心を里の母にされながら、学会で地方へ出掛けるような事も増えていきました。

このエピソードを思い出すと、私の胸はキュンと痛みます。もっと、しっかりと暖かく、ゆったりと力強く、心地好いだっこを充分に経験させてやればよかった！

ママ もっとやさしく

次女が、幼稚園の終わりのころ話してくれたことに、

こんな事がありました。

「ママ、恵美はね、「ママがもっとやさしければいいのに」と思ったことがあるの。」

ずっと前、大きな荷物を背中にしょったおばさんが、お庭に入ってきたことがあるでしょ。お餅や野菜をしょって、両手に植木鉢さげて入ってきて、大きな荷物をヨイショって降ろして、「買って下さい」って言った時、ママに「間にあっていますから、いりません」って言ったでしょ。恵美、あのおばさんがかわいそうで、涙がでちゃった。ママ、親切にしてあげればいいのかに思っただの。」

この事と直接の関係はないかと思いますが、次女が字を覚え始めたころに書き付けたものに、

「きみの きみの かなしみ さようなら

この かなしみに さようなら

ぼうとにのって いっちゃった」

という言葉があります。

幼な子の柔らかな心が感じていることを、知らず知らずのうちに踏みつぶして、ずいぶん悲しい思いをさせていたのではないかと、今になってしみじみと思います。

ママとお風呂

長男の誕生は、娘達二人の育児経験によって母性の開発されてのことなので、ゆとりをもって迎えることができました。出産の当日も、長女のプラネタリウムの見学に付き添う予定でいたほど、妊娠の末期まで元気に動いておりましたし、出産も、無痛分娩のせいもあり、楽しい思い出として心に残っています。

そんな息子との、まだ、だっこをしてお風呂に入れていた頃のことです。湯舟のまわりのタイルに貼ったシールの、熊ちゃんやうさぎさんを見ながら、おしゃべりをしていた時、息子が突然、

「ママ！ ママのお目々に、あっちゃんがいる！」

私も、しっかりと息子を見たら、息子の小さな瞳に、

私映っていました。

忘れられないシーンです。

息子が三つになった頃には、

「ママ、人間はどうして生きられるの？」と尋ねられて、びっくりしたことがあります。

深く感動しながら、「ごはんを食べて、運動して、それから、神様が守って下さっているから」と説明をした日のことが、昨日のようにも、遠い遠い昔のことのようにも思い出されてまいります。

パパ

未成熟ママに比べると、大勢の姪や甥と身近に接触していたパパは、「赤ちゃんは眠くなると、手が暖かになる」というような事も知っているベテランでしたので、とてもおおらかに自然に、子供の相手をしていました。

長女は赤ちゃん時代から、パパが帰るまで眠らないで

待っていましたし、次女も食事中まで肩車をねだるほど、パパが大好きでした。

軽々と、しかもしっかりと抱き上げてくれるパパの腕の中にいることは、子供の心をすっぽりと満たしてくれる、安定感の体験だったと思います。

パパを大好きだったのは、息子も例外ではなく、娘達同様、息子の最初に覚えた言葉も、「パパ」でした。

パパの家にいる休日は、朝早くから、「パパ」「パパ」を連発し、パパの後についてまわっていました。嬉しくってたまらない様子は、見ている者まで楽しい気分になせられました。

ちょうどその頃、祖父（洋画家）が絵のモデルに飼いだめたカラスまでが、息子の声を真似て、「パパ」「パパ」とソプラノで鳴くようになった程でした。

子煩悩な夫ではありませんが、働き盛りの宿命で、休日以外は子供と過ごす時間はありませんでした。パパがいる時といない時とは、子供の表情の張りが全く違うので、出来るだけ子供との時間を作って欲しいと、度々頼

んだものでした。

夕方、五時に仕事が終わって、六時には家族そろって食事が出来るという、かつての日本の当たり前の生活に戻ってきたなら、子供達の心の安定にもっと良い影響があることと、私は確信いたします。

#### 母なるもの

乳幼児のころにとって、大切な母性の機能として、英国の優れた精神分析家であるD・W・ウィニコットは、

- 1 抱っこすること (holding)
- 2 あやすこと (handling)
- 3 対象になること、ないしは現実化すること（つまり幼児の創造的衝動を現実のものとする）(object-presenting) を主張しています。

そして、「要するに、情緒発達は、成熟過程のもつ遺伝性と生きる体験の積み重ねの問題ですが、発達促進的



環境 (Facilitating environment) なくしては起きないものです」と言い、「さらに、発達促進的環境は、最初のうちは絶対的に、次第に相対的に重要」と述べています。

子供達の一生にとって、そんなにも重要な役目であるママとしての機能、もっともっと心を入れて担うべきであったと、子供達に申し訳なく感じるこのごろです。

(立教女学院短期大学)

#### 引用文献

D・W・ウイニコット著 牛島定信監訳

「子どもと家庭」 誠信書房 一九八四年



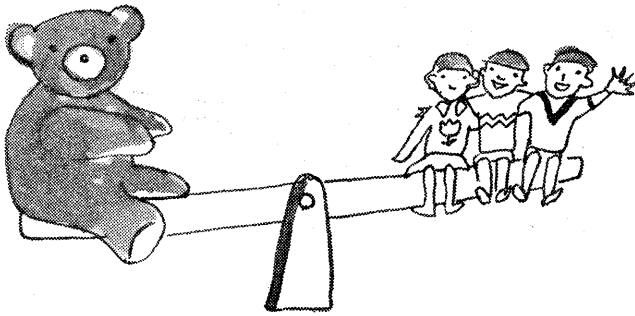
# 子どもたちのこと

## 大橋利恵子

### 四、自信をもったS子の成長

(5才児女子)

S子は三姉妹の末娘で、目のくりっとしたかわいい女の子である。明朗な性格でよく笑う。教師のしていることをにこにこ見ていたりする。ままごとや製作、積木遊びなど好きでよく遊ぶが、子どもらしい発想ができ、例えば、砂を使ってままごとをしていると、おだんごがハンバーグやケーキやいろいろなものに見たてられてい



るし、「これは〇〇のつもりね。」などと言う会話がよくできてきている。しかし、人前に出るのはすごく恥ずかしいが、自分は遊べても遊びを広める役にはなかなかないし、友だちとのつきあいも広く浅くの方であった。

そのS子の一番のりが手は給食だった。岐阜市立の公立幼稚園では小学校と同じ給食を実施している。4才の子が始めて家庭から出てきて、給食を食べるということが、がいかに大変なことか、容易に想像できる事と思うが、最初は食べられなくてあたりまえなのである。それでも、半年―一年近くたてば多くの子が給食になれて、普通に食べれるようになるのだが、クラスに五―六名はなかなか食べれない子が必ずいる。その子たちの半数はいわゆる偏食であるが、半数は食事の時間が長いタイプである。それでも5才児クラスになり、活動量がふえてくると食べるようになってくるが、時間がかかる子の場合、なかなか早くはならない。給食の為の食堂があるのならいくら時間がかかってもよいのだが、保育室で食べているのでそうもいかない、しかたなしにまだ食べたい

子は部屋のすみに集まって食べるようにして片づけることになる。

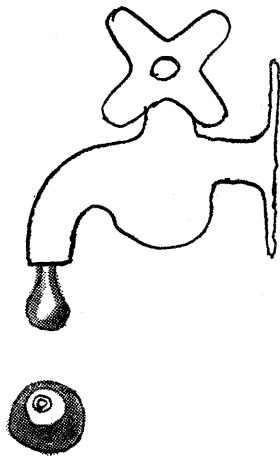
S子は5才クラス秋になってもいつもそのすみの席に集まって食べる二―四名の中の一人だった。S子の場合、その席にきてからいっしょうけんめい食べるという具合で、それまでの時間はおしゃべりしたり、よそ見したりしているのである。家での食事の様子を聞いても同様で、母親も早くしなさいと言う以外別にどうするわけでもなくあきらめているようであった。食事の時間が長いこと自体はたいして大きな事ではないはずなのだが、最近の小学校のいじめの話を聞くと、給食がたべれない、動作がのろい、反応がにぶい等のことがいじめの対象になるそうで、そういわれてみれば、S子は着がえもゆっくりである。一度気になると、何とかしなくては…という気持ちの方が強くなり、毎日のようにそばに行っでは「早く、ほらよそ見しないで、もう少したくさん口に入れて」とついつい口やかましく言うばかりになってしまっていた。

ある日、保育参観にドッジボールをした。男児たちは好きで以前からよくやっていたのだが、女児たちはボールがこわいこともあってなかなか入れなかった。ちょうどよい機会なので、男、女を分けて、女児と女児の父兄男児と男児の父兄で対戦した。キャーキャーと、後向きに逃げてしまう子の多い中で、S子はしっかりと胸でボールを受けとめて活躍していた。さらに時間があって男児と混合チームになった時もS子は男児の強いボールを見事に受けて拍手をあげていた。このように集団の中でS子が注目をあびたのは始めてで、本人もかなりうれしかったようである。その日、ひとつうまく行くとすべてよくなるもので、活躍しておなかのすいたS子はさっさと給食をすませてしまったのである。日ごろ気になっていた分だけ、ほめ言葉も多くなり、S子にとっては最良の一日だった。

その日以来、S子が給食をおそくまで食べている事も少なくなり、何でも積極的に参加してくるようになった。5才児のげぎの会のセリフも長い言葉が言えた。あ

の日の自信がS子を伸ばしてくれたようである。やはり、その子の行動をよく見ていて、適切にほめることが大切だなどしみじみ思うわけである。

(岐阜北幼稚園)



## はるにれの会

若いおかあさんたちへ

向山陽子

私、只今、三十四才。夫、三十四才、一人娘二才の三人家族。結婚六年目、三十一才で娘を身籠りました。遅い出産に入るでしょう。当時の職業は幼稚園教諭。主任という役職にもついていました。産休、育児休業あわせて約九ヶ月休んだ後、娘を生後七ヶ月月から保育ママさんに預けて復職。仕事、家事、育児と、時間に追われ、家の中でも走っているような生活の中に、夫、娘をまき

こんでがんばっていましたが、家族全員の精神的疲労慢性化に、厄年を意識せざるを得ないような諸々の事情も重なり、考えるところあって娘が一才四ヶ月の昨年三月退職。十一年続けた愛すべき職業から離れるには大変な決意を要しましたが、今では、ゆったりとした時間を存分に味わいながら、自分で生活を組み立てる喜びも知り、娘の成長をこの目で確かめられることに感謝しながら

ら、地域のおかあさん仲間と子育てについて何だかんだとおしゃべりをしながら楽しく過ごしています。命を育てている喜びを共有しあえる地域のおかあさん仲間と共に、生活しているという実感のあるこの毎日は、私の人生の中でわずかしかない貴重な時間だと思っています。娘の成長と共に私も娘も、他のおかあさん達も、自分の世界を持ち始める事でしょう。そうありたいものです。それ故、今のこの時期を大切にしたい私です。

自己紹介のつもりで娘を身籠ってから今に至るまで、つまり、私のわずか三年にも満たない母親歴（母親歴というのものはずかしいですが…）をこうして書いてみると、妊娠の時期、仕事を持ちながら子育ての時期、地域での子育ての時期とそれぞれにさまざまな事に出会い、考え、対処してきた事を思い出します。それは、どれ一つをとっても、同じ女性として生をうけた娘に語り継がなくてはならない、女性の、夫婦の、家族の、社会の問題につながっていきます。娘が大きくなるにつれ、さら

にいろいろな問題に出会い、考え、対処していくことでしょう。

そして、娘を持って一番嬉しいことは、娘といっしょに、私自身の人生をもう一度生きることができ、私自身をみつめなおす機会を与えられた事です。

こうして書いていると私にとって、妊娠、出産、子育ては幸せいっぱいのように思われるかもしれませんが、私は「妊娠、出産、子育ては女性の最大のストレスである。そのストレスをのりこえていく過程で母親になっていく。それを成母期という。」という意見に賛同します。授乳とおむつの洗濯に追われる毎日の中で、復職する日を指折り数えたものでしたし、預ける保育ママさんがなかなか決まらなかった時は、私はこのまま家の中にうずもれなくてはならないのではないかと、あせったものです。

「子殺し」や「主婦のアルコール中毒」の事件には、そうなっていた母親や主婦の気持ちがかかる気がしました。そして私はできるならば辞めたくなかった職場を

離れなくてはなりませんでしたし、公園で出会う地域のおかあさん達の中には「子育てを楽しんでいる向山さんが羨ましい。楽しいなんて思ったことはない。」と帰りの遅いご主人を待つ子どもと二人だけの生活を嘆く人が大勢います。私は同じやるなら楽しまなくっちゃと思っていただけですし、「はるにれの会」の仲間と話して発散したり、出産が遅かったために友達や、幼稚園のおかあさん達の経験談を聞けて、他の人よりも予習ができているのかもしれない。幸いにも、子どもの遊びをおもしろいと楽しめることは、児童学科卒で、幼稚園で子どもとの生活に長年浸っていたお陰かもしれません。

ある時、公園の落葉でやきいもをしたり、歩いて30分位のS公園へのピクニックを提案しましたところ、子ども達よりもおかあさん達がはりきって参加するのです。誰も皆、時には日常から離れて外へ出たいのです。毎週火曜日は公園でお弁当を食べることにしたり、冬の間は、一軒ずつ順番に家を開放し、たくさんの母子が集まってくるにぎやかにやるようになりました。その中で「子ども

もを預けて働きに出ようかと悩んでいたの。だって昼間子どもと二人きりで、二人ともイライラしてるの。子どもも私も友達欲しかったね。」というおかあさん。「公園での井戸端会議を馬鹿にしていたけれど、ここで発散するのが一番いいわ。」とお姑さんとの事を泣きながら話すおかあさん。「今度の夏には水と絵の具を使って我家で水遊びをしましょうね。絵の趣味は子どもが大きくなるまであきらめていたけれど、子どもと遊びで楽しめそう。自分の子どもだけでは思いつかなかったわ。」というおかあさん。動物園や人形劇も観にいきました。おしゃべりは自分の事から子どもの事、世の中の事へと広がっていきます。

(1) 「Kさんは相手のおかあさんに気兼ねして○○ちゃんに言いすぎよ。○○ちゃんにとっては無実の罪が多いわよ。こうしてみんなで仲良くなれば、気兼ねで我子を叱る事もなくなるし、悪い事には他人の子でも叱れるようになるわね。」

(10) ⑥ 「Mさんちではベッドにのつてもいいの？ 我

家は子どもに制限しすぎかしら。」④「うちは狭いでしよう。ベッドを制限したら遊ぶところがなくなってしまうもの。ベッドはとんだり、とびおりたり、視点が高くなっておもしろそうよ。うさぎ小屋がどんどんおもちや箱になっていくわ。」⑤「その家その家の都合、規則があつていいんじゃないかしら。子ども達もこの家では叱られたけれど、あの家では叱られなかった。いろんな家があるんだなあつてわかつていくのではないかしら。」⑥「うちは、子どものためにおとなの領域を左右されることはないと思つているのだけれど。それにうちの子もよくいう事をきくし……。」⑦「それでいいんじゃない？ただ親が頭の中であれやこれや考えるだけじゃなく、子どもをもつと見て、必要ならば子どもに譲れる位の柔軟性があつてもいいと思ふけど…Tくんを見てみるとよくいう事をきくから余計にもう少し自由にさせてあげてもいいと思うな…。うちの子もTくんに似てるので気をつけなくてはと思つているの。」⑧「そうね。旦那さんの考えもあるものね。うちは子どもが一人の時はどうに

か夜はうさぎ小屋にもどつたけれど、二人になつてからは、一日中おもちや箱の観もあるわね。主人もしばらくは仕方がないと諦めてるようよ。」

(イ)、(ロ)はある日のおしゃべりです。良い話しあいができるようにもなつてきました。子ども達もけんかしたり、泣いたりしながら、経験を積んでるようです。

子どもが幼稚園に行くようになれば、おかあさん同志のつながりもできるでしょうが、それまでの三、四年おかあさんとして本当に初期の時代に自分から友達を積極的に作っていくことをおすすめます。近くの公園に毎日(午前中がよいと思います)通うのです。子どものお散歩のために、おかあさんの発散のために。きつと同じような母子がいます。いなくとも毎日通っていると必ず現われます。私達母子が遊んでる公園をはじめから今のように多くの親子が集まってくるわけではありませんでした。「たくさんの公園を回ったけど午前中は人がいなくてね。ここへきて、赤ちゃんがいるのでホッとしたいの。」というおかあさんが多くいます。とじこもらずいる



いろいろな人と友達になってください。いろいろな子どもに、いろいろな考えに触れるために。

最後に、この三年間の私の妊娠、出産、子育ての実際から、印象に深く、是非伝えたい事をいくつか書いて終わりにします。

◎私の妊娠 私達夫婦は、夫の強い意向で「人口問題」「社会情勢」を考えて、「子どもは作らない」夫婦でした。私も賛同したと夫はいます。結婚時には、それ程深く考えなかった私であつたでしょう。「それでもいい」と思つてもいたようです。私自身、仕事面では充実していましたが、休日には二人で旅行をして、楽しんでいました。その私が、三十才を間近に感じる頃から無精に子どもを産み、たくなつたのです。子どもが欲しいとか、育てたいではなく、「せっかく女に生まれたのにな、このまま、子宮を使わなくていいのか。卵子をすべて捨て去っていいのか」という欲望にも似たものでした。体が、器官をすべて使ってほしいと訴えているようでし

た。おなかの大きな人を見ると、赤ちゃんを見ると涙が出るのです。夫に、泣いてわめいて頼む事数回、「別れるか、産むかどちらかにして!!」と迫る私に、「一人だけ」「私は仕事を辞める」と約束して、彼は主義を曲げてくれました。今思うと、狂気そのものでした。こうして、半年後に私は妊娠しました。と同時に、仕事をいつ辞めるかという悩みが生じました。

◎私の産院選び 妊娠判定を受けた後、「○月○日○時に来院の事」と告げられました。その日は仕事の関係でどうしても都合がつかず、その旨申し出たところ、返ってきた言葉はたった一言、「それなら産めませぬ。」子宮中心に巡りはじめていた血液が頭に逆流し、不信感でいっぱいになり、「ここでは産めない」と決めていました。小さいながらも、産科では名の知れた病院なのに。この時から私の産院探しはじまりました。身近な人達の例から、母子同室、病院の都合で産まれる日を管理されない、小規模で、医療に安心のできる産院を探しました。とはいえ、どこをどう探してよいのかわから

ない暗中模索の中、一つの新聞記事に出会ったのです。母乳保育を完全に推し進めるために、ラマーズ法出産、母子同室、経験豊かな助産婦さんの産後の母親指導に力を入れている人間味あふれる、街の小さな産院の記事でした。『ここだ!!』とひらめきにも似た感動があり、これでやっと母になれると、安心したものでした。妊娠四ヶ月の半ばに入っていました。地域のおかあさんの中にも、産院をきちんと選ばよかったと悔やむ人が大勢います。特に初産の時は、産院選びのための情報は得にくいのが現状です。もっともっと経験者の情報を交換したい、母にも子にも良いお産を広める必要を痛切に感じます。

私はそのN産院に通う毎にN産院が好きになっていきました。暖かく、母親になるための不安を優しく解消してくれるのです。ですから実家が遠方の事もありませんが、里帰り出産をせずN産院で出産することにし、私の母が産後、上京してくれることになりました。

◎私の出産 出産予定日をはるかに過ぎても陣痛らし

きものも夜には消えてしまいう毎日が続きました。胎盤の機能を調べながらあくまでも自然分娩を主張してくださいる院長先生、助産婦さん達に励まされ、この産院を選んでも本当に良かったと感謝しました。周囲の人達の心配に私自身も不安になる事もありましたが、そんな時、夫が「あせるなよ。いつかは出てくるのだから。」とおちついていてくれた事が一番の力になりました。予定日を一ヶ月過ぎて入院。微弱陣痛で、子宮口が硬くなかなか開かずなかなか分娩台にのりません。やっと子宮が開き待ちに待った分娩台では、嬉しくて嬉しくて興奮して冗談さえ口走ったのを覚えています。ところが、産声をふきこむために回していたテープを後で聞くと、院長先生と婦長先生の会話から、お二人は帝王切開覚悟で臨んでいた事がわかり、自然分娩できた事に改めて感謝するのです。入院して四日目にやっと母となり、難産で母体回復のため、普通より遅くはじまった母子同室の一週間は、授乳もうまくいき、幸せいっぱいの日々でした。

◎生後一ヶ月 私の母親としての三年間の中で最も疲

れ果てたのは、退院後の我家での母を加えての二週間でした。私と娘とは既に産院で共に生活しているので、娘の世話も初孫を迎える母よりも慣れていました。ですから、初孫の世話を楽しみに勇んで上京し、あれやこれやと世話をやきすぎる母に、又、夫に気を使ひすぎる母に、私はイライラしていました。母への甘えもあつたでしょうし、産まれたばかりの赤ん坊を守る動物そのもので、私と娘の間に口出し、手出しする者は例え私の実の母であろうと排除しようとしたのです。抱き方、入浴のさせ方が気に入らず、不安で、すぐに私が代わつたものでした。母は、孫の世話を思うようにできず、慣れない家、街、そして、関東のからっ風も体にはきつく、心身共に疲れきつて帰っていききました。母にはすまない事をしたと後悔しながらも、正直、母が帰って私は精神的な安定をとり戻したのでした。誰もが、母として、父として、祖母としてののはじめての経験にとまどっていたのでしょうか。

私が三十才を過ぎてからの出産である以上、私の母も

年をとっているわけで、この事があって、私にとって母親とは甘えるものではなく、いたわるものに変わりつつある現実をやつとわかりはじめたのでした。

この、新しい母親への補佐役については、私の今の関心事の一つです。核家族や、子どもが少なくなっている傾向、又私のような高齢出産が増えている中で、産婦が最も精神的にナイーブな時期に経験豊かな、産婦の精神的安定を第一に考え、体力、精神力も必要なこの補佐役については、今後も考え続けていきたいと思ひます。

◎そして： はじめて母親になった人で、保健所の保健婦さんや、栄養士さんに「体重が少ない」「離乳ができていない」と叱られ、自信をなくして悩むおかあさんを何人も知っています。ある赤ちゃんは、小柄だけれどピチピチして健康そのものです。六ヶ月検診の時、最近一ヶ月の体重のび率が平均より下回り、その事が母親失格のように言われ、「母乳を信じすぎるからよ。」とまで言われたようです。若いおかあさんは、せっかく母乳でがんばってきたのにと元氣なく話すのです。私はこう

いう話を耳にするたびに、保健婦や、栄養士の方に反省してほしいと憤りを覚えます。多くは、問題点を指摘して、がんばっている若いおかあさん達を自信喪失にさせるだけで、やさしく今後を力づけてはくれません。子育てを楽しくできるよう専門的知識を利用して力づけ、励ますのが、この方達の任務なのに、全く逆の役割をしているのですもの。こんな時に力になってくれるのが経験豊富なおばあちゃんであったり、地域のおかあさん仲間であったりします。「大丈夫、大丈夫、こんなに元氣じゃないの。」昔は、ガキ大将が家へ帰るとおかあさんのおっぱいをすってたなんて話はザラだったよ。今の子はそんなに早くおっぱいから離されるのかい。可哀相に」という風に。

育児書や「平均値」とやらの数字に悩まされる子育てを、おばあちゃんや、おかあさん達の経験に支えられての子育てとしては、どちらが明るく大らかにできるでしょう。

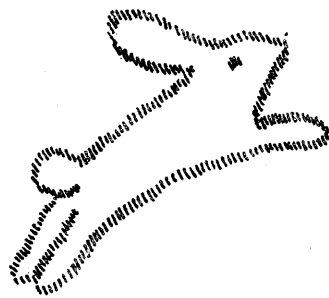
若いおかあさんたち、子育ての経験談や情報を交換しあい、共に育ちあいましょう。

はるにれの会で、ご一緒しませんか。



父と子

蕪木寿江



「お父さん、おもちゃを買ってあげるって言うけど、お母さんが怒るから、お誕生日まで待つんだよ。いっぱい買ってもらうんだ。」

「お父さん、力があるの。筋肉も入っているんだよ。眼鏡かけているけど寝るときはとるよ。焼鳥とビールとお酒と、普通の白いごはんが好きなんだよ。」

「夜遅く帰ってくるの。お休みの時はいつもテレビみて寝ているの。でも、この間、野球見に連れて行ってくれたの。パパね、打つ人のうしろでボール取っている人だったの。」

「お父さんがお父さんで、わたしがお母さんになって遊んでくれるの。会社から帰ると、すぐお酒呑むんだよ。」

「お父さん、お土産にケーキを三つ買ってくるの。いつも自分は食べないんだよ。」

「会社へ行く時、何回もお母さんに起こしてもらおうの。」

お母さんと仲良しなんだよ。」

「お父さん、あんまり遊んでくれないの。小さい時は遊んでくれたんだけど……。」

「日曜日には、サッカーとか野球してくれるの。お風呂に入るとタオルでブクブクのやり方を教えてくれるの。」

キャベツの上に、マヨネーズとトマトケチャップの混ぜたのをかけて食べるのが好き。僕も同じのが好き。」

「お母さんの悪口言ったり、ぶつたりすると怒るよ。部屋の中でドンドンしたり、トイレのドアをガツチャーンとおもいきりやると怒るよ。下の人に叱られるって……。」

「お休みはゴルフに行っちゃうの。一回連れてってくれたの。その時ジュース買ってくれたの。」

「長四角の顔をしていて、眼鏡をかけていて、口も鼻も大きい、サッカーが好きで好きでしょうがないの。い

つもお兄ちゃんに教えているんだよ。選手にするんだって。だからあたしとはあまり遊ばないの。怒るときは真剣に怒るけど、やさしいときもあるよ。」

「土曜日と日曜日でないときはいつもマラソンをしているの。時どきお土産に、ミルクキャラメルを一つか、二つ残して持ってきてくれるの。」

「会社から帰るとすぐバジャマに着がえるの。お休みの時もずーっとバジャマでいるよ。」

「火曜日と金曜日がスイミングでしょ、土曜日がヤマハでしょ。水曜日が英語にいくの。お父さん、くもんも習えって言うんだよ。」

「お父さんの好きなのは、トマトと僕なんだよ。」

父の日も近く、プレゼントの肩たたき券をつくりながら、子ども達の話はつきない。

「トマトと僕……」色黒で、食べる割には痩せっぽちのFちゃんが得意そうに言う。「いいわねえ」としみじみと顔を見る。

何年か前に、ボンボンと話した幸成ちゃんの言葉を思い出す。

「お父ちゃん、蚊にさされると、かいてくれるの——。」  
幸成ちゃんのお父さんに逢ったことが、たった一度だけある。大工さんで建前の婦りかなにからしく、仕事着のまま夕暮れの町を赤い顔をして、仲間と二、三人で歩いていたのをすれ違って会釈した。私はふり返って後姿を見送っていた。この言葉をとっさに思ひ出したからである。蚊にさされてぶくっと小さくふくれたあとを、節くれだった指でさりげなく搔いてあげた父親——。よっぽど気持がよかったのだろう。それを喜びとして受け止める子ども——。父と子……、そしてその背景……。

物質文明に容姿だけでなく、心も触ばまれている現在、その歪ひずみを一番受けているのは子ども達だと言われている。

「子どもが喜ばばいい——。」と、甘えさせるのではなく甘やかし、いたずらに玩具を与え過ぎたり、物で心をこまかすご機嫌とりの父親は、自ら父という厳しい座を、

それ故に暖かい座を、放棄してしまっているようではない。物に覆われているところには、新鮮な感動は育たないだろう。

私は心の奥に蔵ってあるこの言葉に、ときどき出会ってみたくなる。

——お父ちゃん、蚊にさされると、かいてくれるの——。

(神奈川・市ヶ尾幼稚園)

# 「いじめ」の心理について

(前編)

内田安久





この一月、またしてもいじめによる中二女の自殺である。しかも六年ほど前の中一男のばあいと同じように、ノートや教科書に死ねと楽書きされていたという。友だちの軽い悪戯心からの文字だったのであるが、いかに本人にとって鋭い呪いの言葉として胸に突き刺さったことだったのであろう。

なぜ、このようなことが最近続発するのか。いろいろ論議はされている。しかしそれらの原因を簡単に、学校とか家庭とか社会とかの特定なものにしばって、その責任を追求しようとするのは、あまりにも短絡に過ぎる考え方だと思ふ。表面的なことを取りあげるのも、さることながら、もっと奥底を流れる根本的なところに何があるかと、十分に探究してみることが肝要なのではあるまいか。

自殺に関しての、五歳以下の幼児には統計上に数字が見当らないとのこと（児童精神医学の高木俊郎博士著「児童精神科のお話」合同出版）なので、ここでは触れないが、いじめの問題は幼児にもあることを忘れてはな

るまい。幼児の心理や行動は、割合に単純明瞭であるから、まずそれを手がかりに、いじめの心理の底流をまざぐっていけば、ある程度その深層にひそむ原因らしい或るものを、察知する端緒がえられるのではないかしら。そういう視点から、現在のいじめの心理の一面を検討していつてみたいというのが、本稿のねらいなのである。

いじめは、今はしまったことではない。昔からあったのだが、ただ現今のように特殊な異常現象として、世間がとりあげて大騒ぎをしないでいただけのことである。では、なにゆえ現在このような社会問題となったのか、それには一応従来のいじめとの比較をしてみる必要があると思ふ。

従来のいじめの性質を分析すると。だいたい次のような点が挙げられるようである。

①総じて制裁的色彩が濃かった。不正をはたらいた、名誉を汚した、上級者に対する態度がよくない、お洒落でキザで生意気だ、というような理由づけで、けっ

たり殴ったりしたものだ。なかには、かつて上級者からやられたから、今度は自分が下級者に向けて「カツを入れてやる番だ」などという報復的な義理堅いものもあったが、案外たわいもないサラッとしたものだったと云える。

②加害者は、たいていは特定の少数者で、多くは不良性を帯びた者だった。ときには、部活動や級代表者というようなものもあるが、一般にはいじめのあったことさえ知らないというような状態が普通なのであった。

③被害者も、それなりの特定者であることが多く、なんらかの点で加害者との関わりのあるのが多かったようである。そこには、一面擬装的ながらも仁義的ふんいきが感じられないでもなかった。

④腕力を用いる暴力が主で、むら八分的ないじめもあるにはあったが、現在のような陰湿なものはあまりみかけられなかったようである。

以上のような従来のいじめに対し、現今のいじめの特

徴は、一般に次のようなものがあると云えよう。

①単なる弱い者いじめの感が深い。確たる理由はなく、ただ身体が小さい、弱々しい、動作が鈍い、親がない、服装が貧しい、内気者だ、泣き虫だ、などというだけのことでいじめの対象とされる。一種の気運のうごきが強いので、傍からはそれとつかみにくいうらみがある。

②加害者は、かならずしもこれと決まった少数者とは限らず、ごく普通の目だたない人物でも、いじめっ子となるケースが多い。また加害者が単独なばあいも少ない。不特定多数者なのである。付和雷同的に集団化して動き、直接自分では手を出さないが心情的には加害者の立場にたつて傍観している、という者が多いのだと云う。いつ自分が被害者になるかもしれないという不安な気持ちを抱きながら、仕方なくそうしているという者も相当あるのだとも聞く。それが民主主義・平和主義の一面の姿なのであろうか。

③被害者は、特定の少数者か、あるいは孤独なひとり

者のばあいが多い。それを周囲で見まもっている者は少なくないが、かばったり救助したりしてくれる友だちは稀れだという。先生に告げても真剣にとりあげてはもらえず、親には心配かけまいとして黙って我慢するよりほかに、結局それが登校拒否や自殺にまでもつながることになる。こうした傾向があまりにも多い。

④ いじめの方法が陰湿であり、そのうえ残忍性を帯びた傾向さえみられる。入れかわり立ちかわり執拗ないやがらせ、履きものをかくしたり、教科書を汚ごしたり、ノートに楽書きしたり、給食に邪魔をしたり、聞こえよがしの悪口をいったり、そうしたいじめは従来にだって無いわけでもなかったが、さらに集団的に掘めくりとか、裸祭りとか、ついには、煙草火の押しつけや、もつとひどいのはやくざまがいのリンチなどがある。こうなると、これが学校教育を受けているものやることかと驚きあきれるより他はない。

どうして、このようないじめの生態がかもし出される

ようになったのであろうか、と云うことを検討する前に、静かに本来のいじめなるものの構造について考えてみることも必要であろう。ひと口にいじめと云うが、それを遂行する心理状態には、いろいろニューアンスのちがったものがあるはずである。時によって、それら自身に変化したり、または混合したりして、複雑多様なものもなる。そうかと思うと、きわめて単純明快のばあいもあって、一様には扱いかねるのだが、一応それらを分析してみると、おおよそ次のような分類ができるのではないかと考えられる。

① 遊びからくるいじめである。——戯むれあううちに、いつしかエスカレートしてきて感情がたかぶり、やがては一方が他方をしめつけ、いためつけるようになってしまう。笑い楽しんでいるうちに、それが自然にいじめの相となる、悪意のないいじめとも云うべきもので、馴れあいの過剰からとか、興奮感情の爆発からとかいうばあいに多い。幼児の遊びのなかなどで、よく見られる現象であるが、車内の小中高生にも時とき見かけら

れる。

② からのいかのいじめである。——他意ないが、相手の反応をみて、自分のあり方を試みてみようとする心の動きがみえる。多くは自分が優位にあるばあいであって、相手が間違っていたり、イライラしたり、降参したりするのが面白い。したがって、特に相手が抵抗するよう仕向けて、いやがうえにも自己満足をえようとす。軽いからのうちは、相手が迷惑がる程度のいじめといえるが、これが執拗にからむとなると、なぶると呼ばれる深刻なものとなってしまふ。からかっても相手に反応がないと、いじめの効果があがらない欲求不満から、さらにその行動は激化する傾向を示すことがある。

③ やっかみからのいじめである。——成績がよいとか、人気があるとか、美人だとか、お洒落だとか、とにかく自分に劣等感や競争意識をかりたてるような相手に対して、いやがらせをして、やっつけようとするもので、これは、ねたみ・そねみからくるだけに、とかく陰湿度が高くなりやすい。女性の嫉妬からのいじめの凄ま

じさを想像するがよい。それがさらに、怨みつらみと云うことにでもなれば、そのいじめは単なるいじめの範囲から逸脱して、本格的の拷問・虐待ということにまでもなるおそれがある。

さて、以上のようないじめの様態を、幼児のばあいに当てはめてみると、どうなるか。

いうまでもなく、幼児の生活はほとんど遊びで終始する、と云えよう。そして、その遊びのなかで、社会生活への適応への手ほどきを体験し、もちろん人間関係についての学習をする。だから幼児にみられるいじめの性質は、当然前記の①を基盤とするものであることが了承される。しかし②のケースも少くはない。相手の玩具をとりあげたり、造ったものを傍から壊したり、相手を突いたり倒したり、つまりは相手をからかう意味でのいじめとなる。こうした行動は、ある意味では相手欲しさの表現とみられる節もある。

ところが、特に注目すべきは③に属するケースのばあいであろう。幼児は単純未熟であるだけに、その表現も

率直である。動作も激しく、コントロールがきかない。

これはと思うと、徹底的にいじめにかかる。幼児だからたいしたことはあるまい、と油断するとあぶない。限界の判別がつかないので、どのようなことでも平気で断行する。かつて、二歳ぐらいの幼児が、生まれて間もない赤ちゃんを、刃物で切り刻んで遊んでいた、という事件のあったことを思い出す。自分のお母さんを奪った邪魔者と思つたことだったのであろうとの想像はつく。だが問題なのはその残忍性である。これは恐らくは、昆虫の羽や手足をもぎとつて、動けなくなった変化をみて喜ぶ無邪気な遊び心と同じようなものがあつたのではあるまいか、と推定すれば、これをいきなり残忍性と云つてのけてしまうのは、いかがなものであらうか。幼児は物を投げたり壊わしたりして喜ぶ。それは自分の行為によつて何かの変化をおこすことができたとする一種の自己意識の開眼であると解釈することができる。これを叱つてその行動を禁止するのは、自我の成長を阻止するものとして、さし控えた方がよいとも考えられる。

けれどもまた他面では、叱られるという障壁にぶつかったことで、自分の行動範囲にも限界線のあることが分かり、自分というものがそれだけ明確に意識されることになる。それが修練による自我の確立への道程にもなるので、この経験を欠くところに甘えが生じ、ひいては人格形成の不毛が生ずることともなる恐れがあるとも云えよう。

では、こうした様態ある幼児のいじめが、その延長の現在の若者の間にみられるいじめと、果してどのような関連性があると考えられるか、またその関連性が現在の幼児教育の面に反映されるばあい、幼児の遊び即ち生活の場における対応は、どのようにするのが望ましいか、これらについて考察することは無意義ではないと信ずるのである。

(つづく)

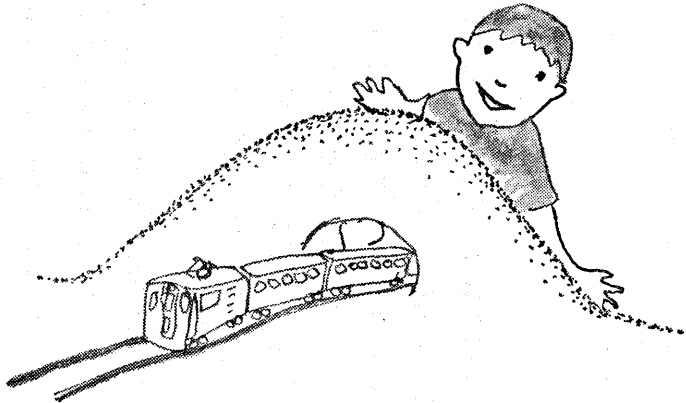
(元お茶の水女子大学教授)

## 教育実習ノート

YさんからK先生へ

○月○日 あめ みどり組

本格的な雨になってしまふ、いつもな  
ら外で元気よくとびまわっているのに—  
—と思うが、子ども達は室内で、それぞ  
れの遊びに熱中している。粘土でパンや  
さんをやっている女の子、ボール紙でマ  
シガンやピストルを作っている男の  
子、時々、撃つまねをして働きかけてく  
る、みちこちゃん。みさこちゃんと手あ



そび（お寺のお尚さん、アルプス一万尺）をしていると、いつの間にか、けいちゃんが傍でじっと見ている。としゆきちゃんやゆうじちゃんも加わって順番にする。ついに、けいちゃんもやってみたくなったのか、私の手を握って上下にふる。「けいちゃんもやる？」ときくとうなずく。手を打って次に相手の手に右手をのせる、という一連の動作はうまくできない。それでもその遊びにしばらく集中する。ともおちゃんがこっちを見ているので誘ってみたが、おままごとの玄関をつくっているのだと言って、積木を運んで来る、一緒に手伝うが、一人でやりたいらしい。玄関ではなく、中が見えないように高く積む。各部屋から集めた毛糸の象さんがねている。紙芝居の時も、前に行ったり、後ろから見たりしていて落ちつかない。

K先生からYさんへ

ともおちゃんは、象さんを、「赤ちゃん」と呼んでいました。「赤ちゃん」とは、人間の子どもを意味するのではないのでしょうか。人間がこわくなった証しだと喜ぶのは、私のひとりよがりでしょうか。紙芝居も、自分が選んだものしか先生にさせないでいました。悲しい物語りがきらいで、その紙芝居をしていると、やめるまで叫んでいました。喜ぶことだけしたいので、ともおちゃんが選んだものだけをやっていまし

た。この頃では、どれでも好きなのですが、絵を見て、人の話を聞いて想像することはできないでいます。生の人の言葉より、動かない活字の方が、機械化した文字の方が確かであり、魅力があり、安心なのでしょうか。

YさんからK先生へ

一週間を終えてみて、今迄、教科書や講義でしか学ばなかったことを、子ども達の活動を見ることによって、ようやく理解できた部分もでてきました。(また疑問を疑問としてまとまっていけないものもありますが)子ども達は、私が考えていた以上に、体を自由に動かし、思考力を持っているということでした。子どもを一人の半分に考えてはいけないということが体で解りました。子どもは世間のおとなが思っている以上に、一人の人間なのです。私の話したいこと、気持はわかってくれます。ただ、自分の我ままを抑えることができません。逆に言えば、自分の心に正直だと言うことでしようか。そういった場合に、どういう方法で、こちら側の伝えたいことを伝えられるか難かしいと思います。また、子どもが、私の働きかけを必要としないときに、私の方から出向いていくというのはいけないことですね。人との関り合いを、言葉に頼り過ぎている私達——。子どもには、それ以外の何か他の共通信号があるように思



えてなりません。

K先生からYさんへ

四・五人で指人形をしています。ピアノの後ろでやっているより、ここに舞台をつくって、お客さまがいたらもっと発展するでしょうと考えます。一緒に積木で舞台をつくりました。椅子を並べました。そうしたら、せっかくの人形劇は終わってしまいました。私は余計者だったのです。先生の「ことは」一つで遊びを発展させるどころか、しぼませてしまいました。

「共通信号」——、何でしょうか……。子どもの中になると、幼なければ幼い程、神さまに近い存在だと思ふことがしばしばあります。「毎日、感動の中にいる」と言っても言い過ぎでないでしょう。しかし、「教育の場」なので、ただ、感心ばかりしていても、保育になりません。一人、一人が、「先生に愛されている」という信頼関係が、共通信号になるのでしょうか。



YさんからK先生へ

幼稚園の先生というものは、限りなく学ぶ人でなければならず、僅かな実習では、とてもなれません。来春から週に一度、来させていただきたいのです。どうぞ、お願い致します。

# ボク、サッカーの選手になるんだ！

——ウガンダのキナルワさんにインタビュー——

## 編集部

アフリカの中では豊かな国といわれるウガンダから遠く離れ、日本に生活を始めて、通算七年になるモゼス・キナルワさん。外交官として来日、現在は貿易会社スタートの準備に忙しい毎日です。奥さまとは、外交官時代、友人の紹介で知り合い結婚。お二人のかわいなお子さんにも恵まれ、はりあいのある毎日を通していらっやいます。週末はアフリカサッカーチームのプレーヤーとして活躍するスポーツマン。そんなキナルワさんに子供時代のことやお子さまの教育について伺いました。

——子どもの頃どんな所に住んでいらっしやったんですか。

キナルワ——すごくいなかね。牧場とか農園とかやってる家だからね。うちは。

——遊び場は、たくさんあったわけですね。

キナルワ——そうね。広がったから、よくサッカーして遊んだよ。サッカー大好きです。

——お友だちも近くに住んでましたんですか。

キナルワ——友だちもいたけど、親類とか近くにいっぱいいるよ。ワタシ、十一人兄弟で、四人お姉さん、六番目から十番目まで男で、ワタシが長男、十一番目は妹ね。だからみんなで遊べる。サッカーもね。

——お母さん大変だったでしょうね。子供育てるのに……。

キナルワ——うん。でも親類もみんな一緒に住んでるから、自分の子とか他人の子とか区別しないで、まとめてめんどうみるんですよ。だからすごい大家族ね。子供も家の手伝いたくさんします。ワタシもよくやったよ。



——学校は近くにあったんですか。

キナルワ——うん。わりと近くね。五キロぐらいかなあ。そんなにかけられないよ歩いて。

——え／＼五キロも。歩くんですか。(思わず驚きの声を上げてしまった)

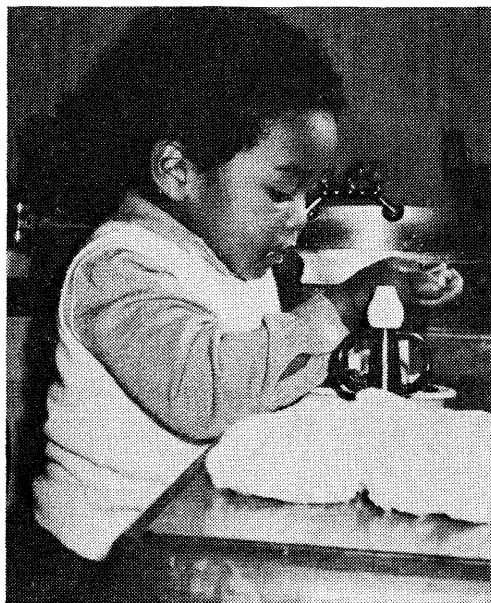
キナルワ——友だち十六キロぐらいの子ざらね。ワタシ

たち歩くの速いですよ。

(長い足のキナルワさんならと納得する。)

——子供の頃、すぐおこられたことってありませんか。

キナルワ——そうね。ううん。友だちとサッカーやってそれに夢中になって、牛を山につれて行って草食べさせるの忘れたね。そしたら、お父さんにうんとおこられ



た。ぶつねお父さん。棒で、たくさん。:

——体罰ですね。私も子供の頃、よくたたかれたり、押入れに入れられたりしました。この頃は親が、人前で子供をたたくの見たことないですね。

キナルワ——日本の親、ちっとも子供に厳しくないと思いうね。日本の子供わがままね。

自分のやりたいことを無理にでも通そうとする。他の人のことあまり考えてないよ。わがままなのと、ノビノビ育つていうのは別のことだと思えますよ。英語教えててそう思うね。親はもっと厳しくてもいい。口で言ってもわからない時は、やっぱり体でわからせなくちゃいけないね。よくおこられました。ワタシ。

——お父さんこわかったですか。

キナルワ——やさしいよ。でもおこるとこわいね。でもね。大きくなったら何も言わないよ。成人すると男の子は別の所に住まなくちゃいけないです。親の所に遊びに来ても、決して泊ってはダメね。大人になったらいつでも親と一緒にいるのをおかしいことです。

——へえ。子どもと大人との区切りがはっきりしている  
んですね。日本だと、いつまでも親と同居したりするで  
しょう。だから大きくなって子どもは子どもの役割り  
をになってしまみたいです。ピーターパンではいられ  
ないんですね。ウガンダでは…。

キナルワ——おかしいよ。大人なんだから。結婚して家  
族で住むのはOKね。でも若い大人の男の人は、別に住  
まなくちゃいけない。

——キナルワさんが日本に行くと言った時、ご両親は、ビ  
ックリなさいませんでしたか。

キナルワ——そうでもない。日本って、自動車、電気製  
品なんかでよく知ってる国。ワタシ自身、自動車とか好  
きだし、日本行ってみたかったね。お父さんもお母さん  
も、あまり心配してなかったみたいね、ワタシ大人だか  
ら。

——ご結婚なさる時、何かご両親はおっしゃいましたか。  
キナルワ——別に。子どもがハッピーならいいね。弟も  
三人日本にいる。すぐ下の弟は、やっぱり日本人の奥さ

んね。その下も、日本人のガールフレンドいる。好きな  
人と結婚するのは当然ね。

——結婚のことで、ここで奥さまにも伺ってみました  
すが。国際結婚っていうことで大変な面もありますでし  
ょうね。



奥さん——でも、私は別に彼が外人だからって結婚したわけじゃなくて、たまたま私の好きになった人がウガンダの人だったんです。そうは言っても私の家は、鳥取のいなかですから、反対もされました。でも好きになったんだから、それを大切にしたいわけです。彼と知り合ってから、一時は、すごく反対されてとても結婚できそうもないというので別れて、家にもどったんですけど、たまたま上京した時、偶然連絡があつて、それでまた会うようになって、彼がイランに赴任する時、私も追いかけて行って結婚したんです。

——わあー。何かドラマを聞いているみたいです。

奥さん——え、そんなことはありません。ごく自然の成り行きですから。親も初めは反対してましたけれど、孫も生まれたし、今はよく上京して遊んでいきます。かわいくてたまらないみたいです。

——お子さんの教育は、どのようになさるおつもりですか。

奥さん——まだ、上の子が二才で、下のが七ヶ月ですか。



ら、あまりよくわかりませんが…。とにかく遊び相手を手を、今はたくさん見つけてやりたいと思います。保育園には、申し込んでいます。うちの近所には、あまり子どもがいなくて、たまにいても、正太しょうたはやはり他の子とちょっとふんいきが違いますから、子どももちょっとどきつとするんですね。まあ馴れてしまえばそこは

子どもですから、楽しく遊びますけれど…。ですから、

今は遊び相手が親としては最大の悩みですね。

——二才と七ヶ月にしては、お二人ともすごくしっかりなさっていますね。

奥さん——ええ、大きいんです。とても体ががっちりして、だから将来はスポーツマンにしたいと思うんですけれど…。

(二才の正太くんは、ものすごくヤンチャで言葉もしっかりしてとても二才児とは思えないほど。七ヶ月のあやちゃんも足がしっかりして、すぐにも歩き出しそうだ。お父さんのキナルワさんの運動神経の良さを、しっかり

受け継いでいるのだろう。)

——学校は近くに行くんですか。

奥さん——今、考えている最中で、まだわからないんですけど…。私は今の子ども達みたいにも勉強だけの生活をさせたくないもので、できればのびのびと育ててほしいと思っています。まあ、勉強よりも、スポーツでがんばってほしいです。だから、日本の学校はどうかかなあと思ってます。幼稚園だけは、近くに行かせるつもりですけれど、小学校は、インターナショナルスクールに通わせようかと思っています。まあこれからが大変でしょうね。

インタビュウを終えて……。

インタビュウの間中、正太くんは、一時もじっとしてなんかいない。エネルギーがいっ

ぱいの彼は、好奇心あふれる大きな瞳を輝やかせては、私に話しかけたり、大好きなプロ

ックを床にバラまいたり、元気いっぱいだった。カメラ好きの彼は、私がカメラを構える

と飛んで来て、レンズに目を近づけ、のぞき込む。そのため、何度も写真がとれる位置ま



で、彼を下がらせなければならなかった。久しぶりに子どもらしい子どもに会ったと思つた。今回は、キナルワさんのお宅でインタビュウさせて頂いたが、正太くんにはどこか室外で会いたかった。太陽がサンサンと降り注ぐ、広々とした野原でも、彼に会えたならもっともつとすてきな笑顔が撮れたに違いないし、そして、キラキラした大きな瞳の彼のバックには、台所じゃなくて、緑の野原が一番似合う気がする。七ヶ月のあやちゃんは、ほっぺが今にも落ちそうな大きな女の子。お母さんのおっとりした性格をうけたのか、彼女もとてもおっとりしている。奥さまのおもてなしのせいか、初めて伺つたおうちで、私は二時間もおしゃべりをして過ごした。なにか大変くつろがせて頂いた。

夕方近く、キナルワさんは、「これから英語の家庭教師に行く。」と言って、奥さまの手造りの弁当をショルダーバックにつめた。「がんですけど、この人についてゆけば安心と思つています。」と奥さまがおっしゃるだけのことはあつて、キナルワさんの背中が、がっちりとして大きかった。渋谷方面に行くといふので、「では私も一緒に。」と言う、キナルワさんは「ワタシ、歩くのすごく速いですから、あなたはゆっくり来て下さい。」と、同行を拒否された。毎日5キロの学校への道のりを走つたキナルワさんの長い足と、私の日本的な短かい足では、とてもかなうわけはなく、私は、あっさりあきらめて、もう一ぱいお茶を頂いてから帰ることにした。

かつて「自明」とされていたことがらが、いま、改めてみつめ直され、問い返されている。子どもをめぐるあれこれも、例外ではない。たとえば「母性愛」、あるいは「子どもの可愛らしさ」、さらには「子どもの無邪気さ、無垢さ、純真さ」などなど……。私どもは、いつの間にか、これらを当然と思い定め、疑うことすら忘れて、というより、むしろ、それらを前提とし、出発点とすら思いなして、子どもの問題を考えてきたのではなかったらうか。子どもの出現を障害視する母親や、可愛らしくも無邪気でもない子どもを前にして、私どもが戸惑い、憤慨し、何かが間違っていると抗議したくなったりするのが、その何よりの証であろう。「母親が変わった、子どもも変わった」と、歎息し、絶望するのも、その現われに他なるまい。

「子どもとは、ある時代に誕生した歴史的産物に他ならず、家族が情緒的な機

能をになわされて、人の成長の情緒的磁場として位置づけられるようになったのは、近代以降の出来事にすぎない。」

フランスの歴史学者、フィリップ・アリエスの提出したこのテーゼが、意味深いのは、先に述べた「母子にかかわる自明性」を問い直すための、明確な根拠を示してくれたことにある。私どもは、母子の結び付きや、家族の情緒的機能を、余りにも「自明」と思い込みすぎて、いつか、それが、あるべき唯一の姿と思ひこみすぎてはいなかったらうか。

いま、その地殻が、明瞭な地鳴りとともに亀裂を見せ始めているとすれば、それは、恐らく、来るべき時代への一つの先触れであるに相違ない。徒らに、既成の形に執着するのではなく、動きつつあるものを直視すること、いま、私どもに必要なのは、その「まなざし」ではないだろうか。

(H)

## 幼児の教育 第八十四巻 第六号

六月号 ①

定価三五〇円

昭和六十年五月二十五日 印刷

昭和六十年六月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 発行人 本田和子

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレイベル館にお願いいたします

# すぐ遊べるゲーム

〈全6巻〉 有木昭久・著



- ① 3・4歳児  
(4・5・6・7月)
- ② 3・4歳児  
(8・9・10・11月)
- ③ 3・4歳児  
(12・1・2・3月)
- ④ 5歳児  
(4・5・6・7月)
- ⑤ 5歳児  
(8・9・10・11月)
- ⑥ 5歳児  
(12・1・2・3月)

- あなたも遊びの名人になれます。
- すぐ遊べるゲームの名ガイドブック。

どのページを開いても、遊びがたのしいイラストで、わかりやすく紹介されています。遊びの基本型と応用の展開例があげてあり、子どもの状態に応じた指導の参考になります。子どもの好きな遊びが年齢別に選べるようになっているので、使いやすくなっています。3・4歳児の友だちづくりから、5歳児のダイナミックな遊びまで種類が豊富です。

B5判・各200頁・定価各1,800円・3巻セットケース入り・セット定価各5,400円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

フレーベル館

# こんなとき"どうしますか、？"

実践での悩みに、重要なポイントやアイデアを、豊富に提供します。

## 保育のアイデア

春・夏・秋・冬(全4巻)

関口 準／荒木久子・井尻佳代子・井上道子・岩瀬満佐江・加藤敏子・川並知子・菊地明子・鶴田一女・富重ミチカ・中臣浩子・中村鈴子・平山照子——編著



### 年間の子どもの姿と 保育活動を網羅!!



- 春(4月 5月 6月)
- 夏(7月 8月 9月)
- 秋(10月 11月 12月)
- 冬(1月 2月 3月)

保育者として、現場で苦勞されている先生方の執筆による本著は、幼児の園生活を春・夏・秋・冬(全4巻)に分け、体験させたい活動内容を紹介しています。実際の保育で行なわれた事例をもとに、子どもの特質を説明しながら、保育のアイデアをわかりやすく具体的に著した実践保育のマニュアルです。

A5判・各280頁・セットケース付・定価各1,500円・セット定価6,000円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

**フレーベル館**